

中村宗雄先生の民事訴訟法学

木 川 統 一 郎

一

ただ今ご紹介にあずかりました木川でございます。私は、昭和二十二年に中村先生と初めてお目にかかりました。しかし、中村宗雄先生のお名前は戦前にすでに書物を通して存じ上げておりました。その書名は非常になつかしい中村先生のご本でございますが、『訴訟法学の体系と訴訟改革理論』という昭和十七年の本でございます。私はこの本を神田の古本屋で見付け、「訴訟法」と書いてありましたので、内容を知らないまま買い求めました。そしてわからないままに開いたのでございますけれども、まず目次を見ますと、これは法律の本ではないんじゃないかと思われるほどのいろいろ哲学的なことが書いてございます。で、これは一体どういう学問だろうと、私は、非常に興味をもちまして、この本を読み、そして驚きました。当時は戦前でございますので、滔々たる国家主義の思想、全体主義の思

中村宗雄先生の民事訴訟法学

想、こういうものが世の中を支配していたのでございます。日本で名だたる学者の方々がいろいろ思想的な論文を当時お書きになっておられました。法律家もそうですが、哲学者、思想家、評論家、いろいろと有名な先生方がお書きになっておりました、それらに共通していたことは、国家主義的なもの、考え方でございます。そのような、いうなれば全体主義的な思想的ブームの中で、先生はナチズムに対する批判をバッチリこの本でお書きになっているわけでございます。これが、若い私にとりましては、非常な刺激となりました。今私が思うのに、世の中の歴史の転換という場合に、時流に乗っていい顔をし、いろいろの思想問題や評論をお書きになっている先生方というもの、あまり信用ができないのではないか、こういうふうに思うのであります。いろいろ偉い先生がいろんなことをお書きになりますけれども、自分で考える、世の中でどんなことが通説として妥当していても、自分の頭で考え、そして納得づくで

自分の意見をもつということがいかに貴重であるか、ということをつくづく私は感じたのであります。私はこの書物をきっかりにいたしまして、世の中の多くの人々の論文に左右されずに自分でものを考える、ということを経験中にやろうといたしました。それが、私の若い時代の非常に大切な思い出であります。これは、戦争中であらうと、戦後であらうと、そしてまた今この時代であらうと、同じく共通することである。学問をする姿勢といえますか、人間の生きる姿勢といえますか、そういうものを私はこの書物で学んだのであります。

二

その後、私も人並に法律学を学びまして、法律の方の研究者になろうと心がけました。昭和二十二年に私は国家試験に通りました。そして、当時私は中央大学の法学部の学生でありましたが、後進の指導ということで中村先生に何かいいお話をお願いしようと、先生のところをお願いに来たわけでございます。その当時の我々の認識、これは今でも正しいことだと思っておりますが、中村宗雄先生は私立大学が明治以降に生んだ最大の学者である、少なくとも最大の学者の一人であられる。そういうふうに我々は認識しておりました。そこで、私はおそろおそろ中村先生のところに参上し、司法試験を受けようとする中央大

学の若い学生のために何かいいお話をお願いしたい、と直接ぶつつけ本番に、お願いをいたしました。そうしたところ先生は「君は僕の名前をどこで知っているんだ」というふうなことでございまして、私は『訴訟法学の体系と訴訟改革理論』というご本で存じ上げております。訴訟法学というものが、いかに社会の実態、あるいは国家という組織の実態にのった制度であるか、そして、それらを含めて考えなければ本当の訴訟法学はできないということを私はここで学びました」というふうなことを申し上げました。そうしますと、「よし、お前はいろいろ考えておるようだから、ひとつお前のために中央大学に行ってやろう」ということになりました。お約束した日、私は、早稲田の研究室に先生をお迎えにあがったのでございますが、十五分ほど遅れました。大先生をお迎えするのですから、私はタクシーをひろって来たのでありますが、タクシーがなかなかこなくてそれで十五分遅れました。で、これは中村先生におられるかと思っておずおず行ったところが、「や、君か。待っておった。多分、君はタクシーを探すのに十五分遅れたらう。君の性格では十五分位前に来るつもりだったらうから二十五分位かかったらう。」と、こういうふうなことを中村先生にいわれたのでございます。先生は非常に厳しい面もございすけれども、非常に暖かい人間的な方でございます。人の立場や苦勞

というものをよく理解される、こういう方でございます。私はまさに図星でして、「その通りでございます」と申しますと、「そういうことはせんでいいのだ」というふうにおっしゃいました。そういうことがきっかけで、私は中村門下に入門させていただきました。

三

私はその後、中央大学の法学部助手になりまして、民事訴訟法学会の東京部会の事務をおおせつかったわけでございます。戦後、最初に設立されました学会は私法学会でございましたが、民事訴訟法は、当時その一部会として扱われておりました。しかし、中村先生が関係者に熱心に働きかけられた結果、昭和二十四年に民事訴訟法学会が独立の学会として設立されたのでございます。初代の会長は、当時中央大学の総長であられた加藤正治先生でございました。加藤先生は、東京大学の菊井維大先生、兼子一先生の先生にあたられる方で、日本の民事訴訟法学の出発点の頃に学問を完成された大先生であります。この民事訴訟法学会の事務をやりましたのが、学者側では一番若僧の私でございます。裁判所側では今最高裁判所の長官をなさっております寺田裁判官でございました。そういうことで、私は当時から現在の長官を個人的によく存じあげるようにな

ことになったわけでございます。

その頃はまだ戦後の混乱した時期で、日本の司法制度をどうするか、ということが大いに論議されました。民事訴訟法の分野では、現在の民事訴訟規則の前身である「民事訴訟の継続審理に関する規則」や「最高裁判所における民事上告事件の審判の特例に関する法律」が制定された時期でございまして、これらは、いずれも民事訴訟法学会の研究会で議論されたものでございます。丁度、足場もよいということで、神田の中央大学の校庭に、西園寺公爵の別邸がございましたが、そこが民事訴訟法学会の研究会場となりました。けんけんがくがくの会議がそこで行なわれました。ご出席になったのは加藤正治先生、それから東京大学の菊井先生、兼子先生、一橋大学の田中夫先生、慶応大学の宮崎澄夫先生、明治大学の野間繁先生、こういう大御所が集まられて、裁判所の側は、眞野毅最高裁判所裁判官、関根小郷民事局長その他事務当局の方々がご列席になりました。そこでの議論というのは非常に激しいものがございましたが、今でも強烈に印象に残っているのは、上告制度をどうするか、という問題でした。この議論の要点は、とどのつまり、裁判制度というしくみが国民のためにあるのか、それとも国家のためにあるのか、ということでございます。戦前、日本は約五十名近い裁判官からなる大審院をもっておりましたが、終戦

後、アメリカに倣って憲法を改正し、それに伴ない司法制度も改めました。その結果、現在のように十五名の裁判官からなる最高裁判所が出来たわけでございます。そこで、一審・二審の判決に不服の人が上告をしてまいりますと、従来、五十名近くの裁判官が処理をしていた上告事件を、今度はわずか十五名の裁判官で処理しなければならぬということになり、最高裁判所に何千件という事件が滞積したのでございます。そこで裁判所側は、これは、上告理由を限定して、十五人の裁判官で処理できるだけに制限すればよろしい。このように法律を改正すればそれで帳尻があう。このように考えたのであります。しかし、国民の立場からみますと、これは大問題であります。この時、中村先生は、民事訴訟制度は一体誰のためにあるのか、国民のためにあるのか、それとも裁判所のためにあるのか、という根本問題を提起して裁判所側の提案に断乎として反対されたのでございます。中村先生は、こう申されました。裁判所の裁判に対する不満を解消するために上訴制度というものがある。一審判決に対する不満は第二審の高等裁判所にいくからこれはいいだろう。高等裁判所に対する国民の不満がたくさんある、それを裁判官にあわせて、そちらにメジャーを置いて裁判制度を変えていくという発想は間違いである、というふうなことで猛烈な議論を展開なさいました。しかし、これは大勢として実際に

は中村先生の方が理論で勝って正しい点をついていながら、結論的には残念ながら成功をおさめることはできなかったのであります。そのとき、最高裁判所と高等裁判所の中間に、特別な上告裁判所をつくって国民の不満をそこで解消するようにしたらどうか、こういうような提案もなさいましたし、またテーブルにのりましたが、結局できないことになりました。

昭和三十三年より十数年間、私は中村宗雄先生の主宰された民事訴訟法研究懇談会という研究会に参加させていただきまして、本日ここにご列席の諸先生方とともに、中村宗雄先生からお教えをうけたのでございますが、この会で中村先生がいわれることはこういうことです。裁判のしくみというのは、国民のためにあるのだ。裁判官のためにあるのではないんだ。あるいは国民の利益から遊離した国家というものを考えて、その国家のために裁判のしくみというものが存在するのではない、ということを強調されたのでございます。民事訴訟規則を作ったり民事訴訟法という法律を改正したりするときに常に火花が散りますことは、民事訴訟法を担当する裁判官を含めた役人、あるいは予算を組む大蔵省、あるいは法務省、こういう国家の側のために有利な条文が作られがちなのであります。こういうものに對して、それは民事裁判の本旨からはずれているんだということを強調されたのが中村宗雄先生でございます。まさに早

稲田スピリットと申しますか、官僚を相手にされました民間の考え方というものを強方に主張されたのであります。私は長い間民事訴訟法を学んでおりますけれども、裁判制度というのは国民のためにあるんだ、という本来の正しいものの考え方というものを私は今でも持っておりますし、これはまさに中村先生から若かりし日にたたき込まれた教育の成果でございます。

四

いろいろの問題を論じるのに際して公益優先ということが前面に押し出され、実はその中味は官僚のわがままや利益、こういうふうな形のものがよく現われてまいります。早稲田大学でも中央大学でもそうでございますけれども、大学というものが一つのしくみとして存在する、そこで学問を研究し、そうして学生諸君がいろいろなことを学ぶ、研究と教育というのが大学の存在理由である。これは抽象的な理論として何びとも否定することはできないものであると思います。しかしながら、しくみが大きくなりますと、いつとはなしにそこにビュクラシーというものが支配いたします。これが経験科学的につかんだ場合の組織の実態であろうと思います。そうすると、結局、大学というものはどんどんどんどんその本来の本旨からずれていて、教員よりも職員がえらかったり、あるいは勉強しないで、

高い月給だけとる教授のために存在する、研究を忘れた教授、勉強を忘れた学生、こういうふうに大学というものはずれてまいります。魔物であります。すべての組織はそうであります。国家というしくみもそうである、裁判制度というしくみもそうである、というふうには私は思うわけであります。中村宗雄先生のおっしゃる当事者中心の訴訟法学、すなわち市民のための法であり市民のための裁判制度であるというふうなご理論というものは、そういう実態を非常に鋭く洞察された考え方であるというふうに思います。そして、実際に中村宗雄先生が加藤先生だとか菊井先生だとか兼子一先生だとか、いろいろな先生方、第一流の民訴の先生方を向こうにまわされまして、あるいはまた最高裁判所当局を向こうにまわされまして、それは間違っておる、こうすべきだ、というふうなことを猛烈に議論された。私の若い日の深い感銘であります。今でもこれは忘れることができません。

雑談の中でも中村先生は、またいろいろなことを我々に教えて下さいました。「日本の歴史を誤まらしめたのは、帝国大学と陸軍大学の二つである」という先生の言葉は、今でも耳に残っています。そしてまた、その裏としてこういうことをいわれております。日本の将来は、また日本の文化の泉は私立大学である、と。私立大学がしっかりしなければ国の方向は間違う。

またそれだけのプライドと実態を、我々は、私立大学関係者としてもたなければならぬ。こういうふうなことを、つねづね中村先生は我々に説かれたのでございます。

五

戦後間もなくの昭和二十三年、日本の学問の向上発展をはかるため、日本学術会議が設置されることになりました。先生はまず私学のトップとして、この会員に選出されました。ここで、日本の学問のため、そしてまた日本の私学のため大いに働かれたのであります。話は少々余談になりますが、そして、また、人々の記憶から次第に忘れ去られようとしていることとございますが、現在、日本の私学が大変な恩恵を蒙っております「国費による私学振興助成」の道は、中村宗雄先生が中心となって、当時の私学人が一致団結し、切り開かれたものなのでございます。昭和二十年代は、憲法第八十九条の「公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又は、その利用に供してはならない」という規定をめぐりまして、一部の憲法学者が「公の支配に属しない私立学校」に対して国が補助金を交付するのは憲法違反であると主張しておりました。そこで「私学振興助成」は

動きのとれない状態にあったのですが、中村先生が学術会議に「私学振興助成特別委員会」を作られ、自ら委員長とられて献身的な努力をなさいました。そして、その結果、私学助成の道が開かれたのでございます。現在、国の「私立大学等経常費」の補助金総額は二千億もの巨額に達しておりますが、そこに到るいはらの道を開拓された先生のご功績は、私学人の忘れてはならないことであると申さなければならぬのでございます。

中村先生は、このように日本の私学の発展のため大変な活躍をなさいましたが、また同時に、学会のためにも大きな貢献をなさいました。先程お話ししましたように、戦後、民事訴訟法学会を、独立の学会として成立させた、その中心的役割を果たしたのは中村先生でありました。また、昭和二十七年三月、会長の加藤正治先生が逝去されてからは、中村先生が、二代目の民事訴訟法学会会長となられ、学会の運営・発展のための指導的な役割を果たしました。日本の民事訴訟法学の活動の中心は早稲田に移ったのでございます。当時ありました、私法学会とか、刑法学会など学会の事務局はいずれも東京大学にありまして、それが中央、早稲田という私立大学にあったのは異例中の異例と申さなければなりません。そして、それができたのは、加藤正治先生、中村宗雄先生がいかに偉大な存在であった

かを物語っているのでございます。昭和三十五年、民事訴訟法学会の改組を機会に先生は顧問となりましたが、その間の先生の民事訴訟法学会のため果されました活躍は目をみはるものがございます。海外の学会との交流の糸口をつけ、民事訴訟法学会の会員が西ドイツの民事訴訟法学会に参加する機会を作られたこと、そしてご自身でもこの学会に出席して講演を試みられ、日本の学界の水準の高さを示されたこと、国内においては、民事訴訟法講座の企画と実現、民事訴訟雑誌の発刊など、いずれも中村先生の発案提唱によって実現したものでございます。中村先生は昭和二十九年還暦を迎えられ、また、昭和三十三年には古稀を迎えられましたが、その際、民事訴訟法学会の会員多数の執筆した論文を掲載致しました還暦祝賀および、古稀祝賀の記念論文集が先生に献呈されております。学者としては記念論文集が一冊でも献呈されればよい方ですが、二冊も献呈されましたのは、非常に稀なことでございます。これも中村先生の学界に対する貢献が如何に偉大であったかを物語っているのでございます。

六

中村宗雄先生は、ただ今お話し申し上げましたように、学術会議において、また学会において大変大きな活躍をされ、いわ

ばそこですぐれた行政的手腕を発揮されました。しかし中村先生の真面目は、何といっても偉大な学者であられたということでございます。先生は、行政面で大変お忙しかったのに拘らず、精力的に研究をつまれ、すぐれた理論を展開され、たくさん書物をお書きになりました。明治以降の学者で中村先生の時代を標準にいたしますと、中村先生ほどたくさん書物を書かれた先生はいないだろうと思います。そういうことで、昭和二十四年、先生はまだ五十四歳のお若さで、おそらく私立大学出身者としては最初の学士院会員になられたわけでございます。

さて、学者としての中村先生については、まず第一に他に例をみないほど大変幅の広い勉強をされた方であるということをおし上げなければなりません。中村先生は民事訴訟法学者であられましたがお書きになったものを拝見しますと、『民法』をはじめ、『民法総則』、『物権法』、『破産法』、『法学通論』、『支那古代哲学思想』などのご著書があります。また、ご自身ではお書きにはならなかったが深くご研究になった分野ということになりますと、物理学、哲学、経済学、社会学、心理学などがあり、中村先生の法律学は、これらのまことに幅の広い基礎の上に築かれていたことができるのでございます。

ところで、中村先生の民事訴訟法学についてであります、これについて中村先生の直弟子であられる内田武吉先生が、か

つて中村宗雄先生を偲ぶ追悼会におきまして、中村民事訴訟法学の最大の特徴としてつぎの三点をあげておられました。

第一点は、民事訴訟制度は当事者のためにあるということを常に強調されたこと。第二点は、民事訴訟法学の理論体系には実体法の理論を取り入れなければならないということを主張されたこと。そして第三点として自然科学に範型を求めて、民事訴訟法学に階層の論理をとり入れられているということであり、第一の民事訴訟制度は当事者のためにあるということ、これについては先程来お話し申し上げました。第二点は、多くの場合、訴訟観の問題として論ぜられているところでございます。

民事訴訟法という法律は、もともと裁判所における手続を規定した法律であり、民事訴訟法は長い学問の対象として取り上げられることはありませんでした。それが学問の対象としてとり上げられるようになったのは、ドイツ普通法末期のことであり、その後、民事訴訟法学が独立の学問として成立したのは、一八七七年のドイツ民事訴訟法成立後、ヘルウィック、シュタインの時代であったと言ふことができると思います。わが国にはその強い影響の下に民事訴訟法が制定され、そして同時に民事訴訟法学が輸入されたのでございます。ところで明治から大正にかけてのわが国の民事訴訟法学の担い手は、裁判所の

実務家が中心でありまして、学者が本格的に研究にとりくんだのは、大正期になって仁井田益太郎、雫本朗造、山本正三というような先生方が、民事訴訟法学者として登場されてからのこととあります。このようにしてわが国にも民事訴訟法学が成立したのでございますが、その頃はまだ初期のことでもありますので、民事訴訟理論の体系化というのには、十分ではございませんでした。中村宗雄先生が昭和年代の初めにおやりになったことは、これまでの学説を先生がご自身で考え出された訴訟観という視点からご覧になり、民事訴訟法学に一つの交通整理をなさったということとあります。戦前、先生が早稲田法学その他の雑誌に書かれ、戦後それを取りまとめた書物に、『訴と請求並に既判力』というご本がございます。現在でも、訴訟法学を志す者は必ずここを通り抜けませんと、その後の訴訟法学の勉強に進むことができないといわれているような貴重なご研究でございます。この本の中で、先生は訴訟観というものを強調されました。訴訟は実体法と訴訟法の総合の「場」である。したがって、訴訟理論には、実体法・訴訟法の双方のモメントを取り入れなければならない。これが中村宗雄先生の訴訟観の出発点でございました。ところで、一つの学問体系の下に実体法と訴訟法という異質の二つのモメントをどういう関係でとらえたらよいか、それが学問方法論上の極めて難しい問題になって

おります。一つの体系内における実体法と訴訟法の二つのモメントの組み合わせ方には、およそ三つの型があると申せましょう。一つは、実体法と訴訟法との間に主・従の関係を指定することでありまして、これがつまり、実体法を主とするときは実体法的一元観、訴訟法を主とするときは訴訟法的一元観ということになるわけであります。第三のタイプは、実体法と訴訟法とを並列の関係におくタイプと申せましょう。中村宗雄先生は、これまでの民事訴訟法学発展の跡を克明に辿られた上、ザヴィニーからウィントシャイトに至るまでの訴訟理論は実体法から出発した実体法的一元観の訴訟理論であるとされ、その後、ヘルウィック、シュタインの時代になりますと、これは実体法・訴訟法対立二元観の学説であると分析されました。ヘルウィック、シュタインの学説は、その後長く民事訴訟法学界を支配した優れた学説でありましたが、訴訟理論の体系内に実体法のモメントと訴訟法のモメントの並存を認めている。ところで、この実体法と訴訟法の関係をどのように論理的に整序するか、これが学問方法論上極めて困難な問題でありまして、その後の理論は、訴訟理論の体系から実体法のモメントを放逐して、訴訟法の立場から、訴訟理論を捉える方向に展開してきました。この傾向は、第一次世界大戦後のドイツの民事訴訟法学界に見られる傾向でありますが、日本の学界もこれに追随し

中村宗雄先生の民事訴訟法学

ておりました。東京大学の兼子教授らの見解もこの系統に属するものでございました。さて、中村宗雄先生は、従来の民事訴訟法学を以上のように、私法的一元観、実体法訴訟法対立二元観、訴訟法的一元観と三つのグループに分けて問題を考察されております。ところで、先程も申しましたように、中村先生は、訴訟とは実体法訴訟法綜合の場である。したがって、この訴訟理論には実体法の理論を取り入れなければならない。当時、はやりであった訴訟法的一元観の考え方は間違っているということを主張されたのであります。先程申し上げました戦後取りまとめて発刊された『訴と請求並に既判力』のご論文において先生が主張されていた骨子は、以上の通りであったと言いうことができるのでございます。

しかし、中村宗雄先生の民事訴訟法学は、そこに留まることはありませんでした。訴訟に実体法と訴訟法の各モメントが内在し、対立すると分析しただけでは、訴訟現象を全面的に把握したことにはならない。それは、綜合止揚されなければならないのであり、それをどのように把握するかが先生の当面した次の問題でありました。

中村宗雄先生のご論文を拝見しますとすぐ気付かれると思いますが、先生のご論文には、ニュートン物理学とかアインシュタインの相対性理論とか自然科学に関する理論が随所に展開さ

れております。先生はこう考えられたのでした。これは、普通の法学者の思い至らないところでありますが、自然科学の方法と社会科学の方法の間には同じく学問の方法として共通のものがある。しかも、自然科学の方法は、その正否が実験によって確かめられるため、社会科学に比べて数段進歩している。そうであれば、自然科学の理論を模範とすることによって、社会科学のあるべき理論の姿を探し出すことができる。先生はそう考えられたわけでして、法律学者としては、他にその例がないほど自然科学に関する書物を克明に研究されていらっしゃいました。

自然科学の分野においては、ニュートン物理学はその後、相対性理論、量子力学をその分野に加え、発達してまいりましたが、ニュートン物理学とその後の物理学の間には階層関係が認められる。そのことにヒントを得られて、実体法理論と訴訟法理論、そしてその上に裁判論という三者を階層的に組み立てる理論を構築されるに至ったのでございます。昭和三十年に取りまとめで発表された先生のご著書『自然科学に範型を求めた民事訴訟理論の再構成』は、以上の立場で書かれたものでございます。先生はこれのお立場を実体法・訴訟法綜合二元観あるいは階層二元観と名づけられ、訴訟現象はすべてこの立場において考察すべきことを主張されたのでございます。

中村宗雄先生が民事訴訟法学を始めた頃はまだドイツの民事訴訟法学の影響の強い時代でありました。中村宗雄先生は、それらのドイツの学説を完全にフォローし、その上でドイツの学界においてもまだ主張されたことのない実体法・訴訟法綜合二元観という理論を打ち立てられたのでありまして、これはただ日本の民事訴訟法学というばかりではなく、世界の訴訟法学に大きく貢献するものであると申さなければならぬのであります。

中村宗雄先生のその後の学説の発展の成果は、昭和五十年八月先生が亡くなる直前まで続けておられました『訴訟の目的・その巨視的研究』というご論文に集大成されております。このご論文は、ケルン大学のバウムゲルテル教授の依頼によって、中村先生の新たな理論をドイツの学界に紹介するために執筆されたものであります。この論文は、すでに独訳されており、近くバウムゲルテル教授が編集されておられるヤパーニシエス・レヒトの紙面においてドイツの学界に紹介されることになっていると聞いております。まことに中村宗雄先生は、早稲田の中村先生であり、また、日本の中村宗雄先生であり、また、世界の中村宗雄先生であつたのでございます。

七

私は十数年、中村宗雄先生の主宰されました民事訴訟法研究懇談会を通じて、先生から数々のご教示をいただき研究を続け参りましたが、その後、私は民事訴訟政策に興味をもつようになりました。

丁度、中村先生が、自然科学に範型を求められて、階層理論を組み立てられ先生の学問が大きく展開されたというあたりから、私自身は自然科学と並んで、社会科学的な民事訴訟法の実態を追求するという方向で、研究を進めて参りました。実体法と訴訟法を併列関係に並べる、あるいは二つに対立させて、そこで調整的な結論を引き出す、こういうふうなことをするといたしましても、裁判の実態を考える、紛争の実態を考える、あるいは当事者訴訟法学からはずれた民事裁判の実態を、事実と証拠とに基づいて固め、反撃の材料をまとめて、そこで民事訴訟の具体的な成果を引き出した方が、現実の訴訟制度にプレッシャーをかけることができる、というふうに私自身考えまして、そこから実務の研究を開始いたしました。そして訴訟法というものはどこに濫用があり、どこに病気が入り込んでいるか、その原因は何か、こういうふうなことを研究するようになったわけでございます。ヨーロッパでは、現在、立法学という

ものが新しい学問としてそろそろ独立しようとする萌芽をみることができます。いずれの国でも、例えば監獄法を改正しようという、法務省はこういう、警察はこういう、弁護士会は反対、裁判官は「こうではないですか。ここはいいけれども、しかしこうでないわけではない」とかむずかしいことをいう。そして、あっちからもこっちからも議論が出て、そして妥協の産物として法律ができる。第三条は弁護士会の片足を採用した。第四条は裁判所の言うところを右手だけ採用した。こういうふうにして、一つの組織を立法として作ります。そうすると、これは昔からいわれておる妥協の産物であります。できあがったものは動かない、こういうふうになります。そこで、ある条文というのは、その背景を前提にいたしますと、いろんな力が働く、条文と全然反対の方向に働く、全然ちがった方向になってしまふ、そういうふうなことを予測しながら、妥協の産物である法というものはどういう方向に動いていくか、こういう法を作っていたらばどうなるか、裁判所の最高裁判所の意見と法務省の意見が対立する、弁護士会の意見が対立する、新聞社の意見が対立する、それをまぜこぜにして、ここの要素をここからとってやった場合は、その要素が条文になったならば、どうファンクションするか。こういう予測を十分研究する必要があるのであります。こういうことを研究しないと、立法とい

うのは、結局国民から遊離してとんでもない方向に行ってしまう。こういうふうな学問が次第に生長しているのでございまして、私の目下の関心は、こちらの方に向いているわけであります。

最後のところは、私が中村先生から学んで、従来の法律学から脱却をして、自分自身が経験科学や、そして価値論的な問題としては当事者中心的な裁判をめざす、こういうふうなことを最近まで私はやっておる、そして、これらは中村門下の勉強の延長線上で行なわれておりますということを申し上げまして、私の話を終らせていただきます。（拍手）